

#### 第4節 インドネシア—「インドネシア化」された海、そしてその脱構築の可能性について

岡本 正明

##### 1 はじめに

インドネシアにおいて「海(laut)」はどのような位置づけを与えられてきたのか。まず、この点について、教科書分析を行う前に、筆者自身が人から聞いたりインドネシアに関する書物から得たりした情報をもとに提示してみたい。

インドネシアはアメリカ合衆国に匹敵する東西幅の広がりを持ち、その広範な領域に1万3,000以上の島を有する世界最大の島国国家である。そして、東アジアとインド、中東、さらにヨーロッパとをつなぐ位置にあることから、地政学的に極めて重要な地域に存在している。こうした地理的配置は、独立後のインドネシアの国民統合・国家統合において考慮すべき最も重要な要素の1つである。インドネシアの島と島の間の海が公海だとすると、数え切れないほどの船舶が自由にアジアとヨーロッパをつなぐインドネシア近海を往来することになり、国防治安上、望ましいことではない。そこで独立後のインドネシアは、島と島の間の水域、群島水域が領海に近い位置づけを国際的に得られるよう努力してきた。その主張は群島理論(Wawasan Nusantara)と呼ばれている。1957年にジュアング宣言を発表して、陸域から12マイルをインドネシアの領海と宣言して以来、その国際的承認を求める努力が続けられ、1982年に国際海洋法上、群島水域を認知させることに成功した<sup>1)</sup>。

こうした理解からは、海は島々を分かちものではなく、島々をつなぐものだという発想がうかがえる。しかし、その「海」はインドネシアの海、インドネシア化した海であり、インドネシア域内の島と島をつなぐ海であって、インドネシアの国民統合・国家統合を保持するというナショナルスティックな発想に基づくものである。従って、アジアに広がる海という発想には至っていない。

ただ、こうして海がインドネシア化されたといっても、国家開発の局面においては必ずしも海が重視されてきたわけではない。独立以後のインドネシ

アの国家構想を単純に二分化すれば、「陸」重視 vs. 「海」重視路線に分けることができる。そして、どちらかといえば常に陸地の開発に重点を置いた経済成長政策が基調であって、「海洋国家としてのインドネシア」という発想は実際の政策としてはあまり影響力がなく、イデオロギー的に傍流的に主張されるというたぐいのものであった。とりわけ、1998年まで32年間続いたスハルト権威主義体制では陸地の開発に力点が置かれていた。

では、海洋国家インドネシアを標榜する主張はどのようなロジックを用いていたのかといえば、おおよそ次のようになる。オランダによる植民地支配が始まる前、今のインドネシアに拠点置く海洋国家が存在していた。ヒンドゥー教を軸に据えたシュリウィジャヤ王国、マジャパヒト王国がその典型であり、こうした王国は海上交易を通じて蓄積した富をベースに繁栄を享受していた。そして、海洋国家主義者の描くこうした王国の領域は、インドネシアを超えて海域東南アジア世界全域を包含するものであった。図1-4-1がその例である。最も濃いグレーの部分にはマジャパヒト王国の勢力圏を、薄いグレーの部分には影響力圏を示している。そもそも20世紀に入るまで、東南アジア島嶼部地域において支配といえば湾岸部や河川部の港を拠点とした点的支配であって、内陸部にまで統治が及んでいた面的支配、近代的支配はあり

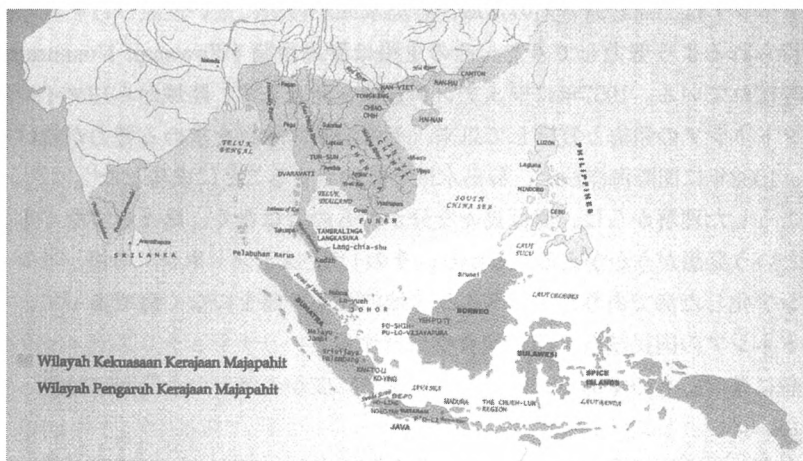


図1-4-1 マジャパヒト王国の勢力圏

(Djoko Pramono, *Budaya Bahari*, Jakarta : PT Gramedia Pustaka Utama, 2005, p. 55)

得なかったのであるが、そうした事実は、意図的か否かはともかく海洋国家主義者の記憶からは忘却されている。近代国民国家的領域観念を近代以前の過去に逆照射して、それを地図に落とし込み、過去のインドネシアの大帝国ぶりを海と結びつけて想像するというこのロジックは、インドネシアのナショナリズム発揚に役立つこともあるが、時に東南アジア海域諸国をインドネシアが支配すべきだという拡張主義的主張と結びついていった。

2005年時点でも、スワルノという退役少将は次のように主張している。

インドネシア共和国は島嶼国家であり、歴史学、地政学的にみて、インドネシア共和国の領域は、全ヌサンタラ、つまり2つの民族から成るインドネシア民族が先祖代々住んできた大きな島々(スマトラ、カリマンタン、ジャワ、スラウェシ、パプア)、その周囲の小さな島々を包含する。——(中略)——従って将来、彼らがわが民族と再び統一することを望むのなら、われわれは受け入れる義務がある<sup>2)</sup>。

スワルノの主張によれば、パプア・ニューギニア、マレーシア領のサバ、サラワク、ブルネイ王国なども本来はインドネシア領だということになる。ヌサンタラという言葉の曖昧性もまたこうした主張を底支えしている。今では現在のインドネシア国家の雅語的表現としてヌサンタラは使われることが多いが、もともとシュリウィジャヤ王国が支配していた地域を指すこともあり、シュリウィジャヤ王国の栄華をインドネシア国家が領土的に再現する正統性概念としてヌサンタラが使われるのである。

こうした拡張主義的主張は、当然ながら主流ではないがインドネシアでは常に存在する意見であり、政策に反映されることもあり、また時代の変革期に勢いを持つ。彼らにとって、西欧帝国主義の到来以後の世界は必ずしも望ましいものではない。とりわけ、オランダによる植民地支配、それ以後のスハルト体制終焉までの時代は開発の力点かもっぱら陸に置かれ、海洋開発がなおざりにされてきたとして批判される。そして、インドネシア漁民は小型漁船で細々と漁業を行って一向に豊かにならないのに、台湾、韓国、日本、タイからの近代的な大型漁船がインドネシア領海内で乱獲を行って利潤を上げ、資源枯渇を引き起こしていることが問題視される。

政権末期、スハルトは1996年を「海洋年(Tahun Bahari)」として位置づけ、

インドネシア民族が海に「戻る」よう求めた。ハビビ研究技術国務大臣（後の第3代大統領）による次のような発言は、インドネシアのかつての栄光と海を結びつける典型的な語りである。「インドネシア民族はかつて海洋民族として歴史に名を残していたが、時が流れるにつれて海洋民族としての資質を失っていき、今では海洋民族の精神も消えてしまった」<sup>3)</sup>。結局、こうした海に「戻る」べきであるとの主張はスハルト体制下で具体化されることもなく、1998年5月、32年間にわたる権威主義的な同体制は崩壊して、民主的・分権的な政治体制が誕生した。

スハルト体制は「汚職・癒着・縁故主義」が蔓延していたというのが当時の一般国民の常識的理解であり、あらゆる意味での「改革 (Reformasi)」を行うことが次の政権以降の課題となった。ただし、前政権の負の側面を払拭するのみならず、新政権にとっては何らかの新しさもまた必要である。海は格好の新味の1つであった。スハルトの後を襲ったハビビに続くアブドゥルラフマン・ワヒド政権においては、海洋漁業省が新設され、海洋開発の重要性を制度的に再喚起した。予算措置としては同省において、貧困削減戦略の一環として「沿岸住民経済エンパワーメント」プログラムが始まり、相当の予算枠が設けられた。また、メガワティ政権時代には、海洋開発を総合的に推進するために「インドネシア海洋委員会 (Dewan Maritim Indonesia)」が発足した。「改革」の時代、地方分権が始まり、自治体にさまざまな権限が移譲され、自治体が独自の開発計画を策定することが要求されるようにもなった。そうすると、各地方政府は農業局と切り離す形で海洋漁業局を設置し、地域の特色に応じた開発計画を作成し始め、結局は各地の自治体がこぞって「海洋開発」を重要な課題に据え、漁業振興などを自治体の戦略計画に盛り込んだ。

以上がインドネシアにおける「海」をめぐる議論であり、具体的な政策の概観である。まとめてみると、次のように言うことができるであろう。インドネシアが多数の島々から成る島嶼国家である以上、国家統合や戦略の上で「海」は重要な位置づけを与えられており、群島水域論に象徴されるように、「海」は陸と陸を「切る」のではなく、「つなぐ」存在として位置づけられている。しかし、ここでいう「つなぐ」存在としての海というのは、あくまでもインドネシア国家統一の観点からインドネシア国内の島々を「つなぐ」という

意味であって、広く東アジア海域につながっているという意識はあまりみられない。むしろ現在のインドネシア国家の領域周辺は歴史的に海を通じてつながっており、インドネシア国家に包含すべきであるという主張、「つなぐ海」という理解から程遠い主張までみられる。また、スハルト体制が崩壊するまでの国家開発計画や実践をみる限り、必ずしも「海」に力点は置かれてこなかった。スハルト体制崩壊後には「海」への関心が高まりつつあるが、どこまで本格化するのかは分からない<sup>4)</sup>。

## 2 教科書分析—インドネシアの事例から

では、教科書において「海」はどのような位置づけを与えられているのだろうか。ここでは、最新の2004年カリキュラムに基づく「地理」「歴史」「国語」の教科書(中学校ならびに高等学校)を取り上げて分析していくこととする。

### 1. 中学校、高等学校の地理教科書

中学校の地理教科書は、エルランガ社とガラクシー・プспа・メガ社という2出版社のものをを用いた。国民教育省が基本的カリキュラムを作成しており、当然ながら両社ともそのカリキュラムに沿って教科書を作成しているが、「海」への言及量は大きく異なる。ガラクシー社の教科書はp.90からp.116の27ページであるのに対して、エルランガ社の教科書はp.198からp.260の63ページであるというように教科書の分量に大きく差がある。それもあって、エルランガ社の教科書の方が3学年分を通じて「海」についての言及ははるかに多く、ガラクシー社の教科書では「海」そのものへの言及が非常に少ない。

エルランガ社の中学校地理教科書における「海」の扱いをみると、基本的な海の役割が述べられているほかには、インドネシアの地理的位置づけの説明において次のような表現がある。「インドネシアは島嶼国家である。島々はサバン(インドネシアの西端)からメラウケ(東端)まで広がっている。——(中略)——インドネシア国民としてわれわれは、インドネシアが広大な国であり多種多様な天然資源が豊富にあることを誇りに感じよう」<sup>5)</sup>。こうした記述と並んで、海に取り囲まれたインドネシアの地図(図1-4-2)が提示されている。さらに、インドネシアの地理的位置がもたらす影響として次のようなものが触れられている。「島嶼国家インドネシアは海から非常に大きな影響



図1-4-2 インドネシアの地図

(Tim Abdi Guru, *Geografi 2 untuk SMP Kelas VIII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 92)

を受けており、——(中略)——インドネシアの人口の多くは、漁業や海洋交通など海洋資源で生計を立てている」。また、「島嶼国家インドネシアは交差点にあり、インドネシア領はイスラーム、ヒンドゥー、その他の文化のようにさまざまな民族の文化が出会う場所となっている。インドネシアは非常に活発な海と空の航路のハブとなっている」<sup>6)</sup>。

海と海岸の環境保全に関する項目では、「インドネシア領土の物理的形態は海峡と海洋に囲まれた島嶼部であり、世界最長の海岸線を所有している。こうした物理的状態は経済的に非常に価値が高い、というのは、海には多くの資源があるからである。——(中略)——しかしながら、海は人間の活動によって汚染されることが多く、保全する必要がある——(中略)——」<sup>7)</sup>とある。

こうした記述をみる限り、広大な領土を持つインドネシアは海に取り囲まれている事実が強調されている。その上で、海と空の拠点として重要であるだけでなく、地理的にさまざまな文化が出会う場所であることが触れられており、海を通じてインドネシアが世界につながっていることも指摘されている。海的环境保全を考えるに当たっても、インドネシアが島嶼国家であることが触れられ、それがゆえに他国以上に海的环境保全が重要であるといった形で書かれている。

地域区分としては、東アジアというよりも東南アジアが重要である。インドネシアを近隣諸国の中に位置づけた地図としては、図1-4-3のように、東



図1-4-3 東南アジアの中のインドネシア

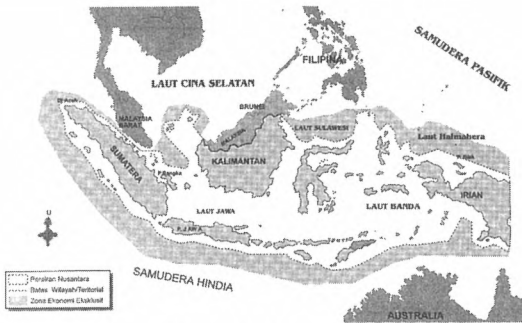
(Tim Abdi Guru, *Geografi 3 untuk SMP Kelas IX*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 37)

南アジア諸国の中の一国として位置づけたもの、あるいはアジア大陸の中に位置づけたものしかない。地理的関心は、東南アジア諸国、オーストラリア、ニュージーランドまでであり、日本も含めたその他の諸国は地理的一体性という観点からではなく、経済的観点から先進国と途上国の特徴を紹介する項目の中で触れられている。その意味では、海を通じてインドネシアを含めた東アジアがつながっていることを指摘するような記述はない。

高等学校の教科書になると、「群島国家」論が国際的承認を得る歴史的過程がやや詳細に述べられると同時に、周辺諸国との海域における国境確定の歴史も詳細に触れられている<sup>8)</sup>。そして、図1-4-4にあるように、海域におけるインドネシアの国境が明確に記された地図が載せられている。また、授業中に学生の間で議論すべきテーマとして、「衛星を使った海洋監視」<sup>9)</sup>や「海岸と海洋の形態」<sup>10)</sup>といったものが取り上げられ、前者では海軍がインドネシア海域を監視している状況が、後者では「わが民族は非常に大きな潜在的な海の資源を有するにもかかわらず、海でたくさんの問題を抱えている」という問題意識の下、珊瑚礁、マングローブ林の減少に警鐘が鳴らされ、海洋資源観光、海底石油資源開発の重要性がそれぞれ触れられている。

## 2. 中学校、高等学校の歴史教科書

ここではエルランガ社の2種類の教科書を用いる。基本的な歴史の流れに



Gambar 6.9 Batas wilayah laut Indonesia. Batas laut akan dijadikan pedoman kapal-kapal asing yang akan menyeberangi lautan.

#### 図1-4-4 インドネシアの海域における国境

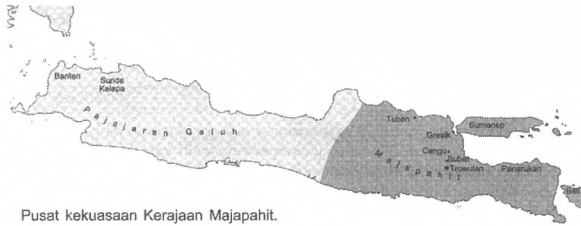
(K. Wardiyatmoko, *Geografi SMA I untuk Kelas X*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 201)

ついでに記述はどちらもほぼ同じである。ヨーロッパ、インドと中国との間にインドネシアが位置することから、海上交易の中継点として繁栄してきた。海上交易の発展とともに、文化・宗教的にはヒンドゥー教、仏教がまずインドネシアで広がり、シュリウィジャヤ王国、マジャパヒト王国といった海洋王国が誕生した。このシュリウィジャヤ王国、マジャパヒト王国は、現在のインドネシアが海洋国家になるべきであると主張するときの参照基準になっている。例えば、マジャパヒト王国の場合、図1-4-5aのようにその中心圏を示したものの以外にも、図1-4-5bのように最大勢力範囲を示したものもある。後者の場合、現在の東南アジア海域諸国がすべて包含されてしまっている。内陸も含めてマジャパヒト王国が勢力を浸透させたはずもなく史実に忠実ではないが、インドネシア拡張主義者の主張の正当化には好都合な図である。

ヒンドゥー教、仏教の到来後、中東で誕生したイスラーム教がインドを経て交易ルートを通じてインドネシアにも到達した。そして、バサイ、アチュ、デマック、マタラム、チレボン、マタラム、マカッサル、テルナテ、ティドレ王国といったイスラーム系の国家が次々と誕生していった。中ジャワの内陸部に発展したマタラム王国を除くイスラーム国家はすべて交易を中心に栄えた港市国家であり、東と西の交易拠点のみならず、内陸部の商品の売場で繁栄した。海を通じてイスラーム教が普及していった様子は図1-4-6や図1-4-7に描かれている。イスラーム諸王国の多くが海上交易を基に繁栄した



第1章 東アジアの教科書における「海」の分析(記述・地図)



Pusat kekuasaan Kerajaan Majapahit.

図1-4-5a マジャパヒト王国の中心圏(右の濃色部分)  
(I Wayan Badrika, ed., *Sejarah Nasional Indonesia dan Umum SMA 2 untuk Kelas XI*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 63)



図1-4-5b マジャパヒト王国の最大領域図  
(Machi Suhadi, Sutarjo Adisusilo, and A. Kardiyat Wiharyanto, *Sejarah SMP 1 untuk Kelas VII*, Jakarta : esis, 2005, p. 36)

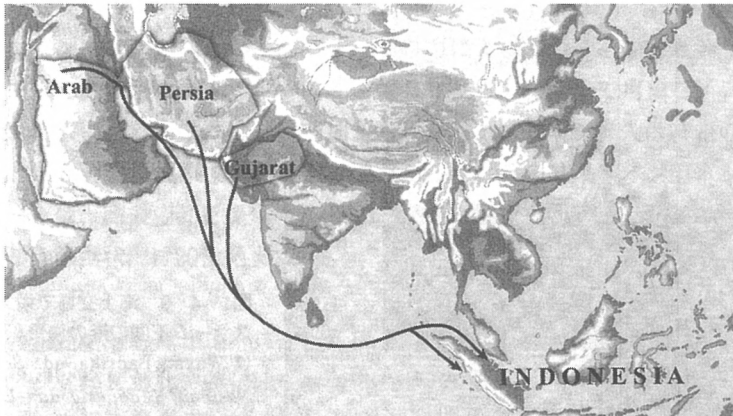


図1-4-6 インドネシアへのイスラームの普及経路  
(Matroji, *Sejarah 1 untuk SMP Kelas VII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 142)

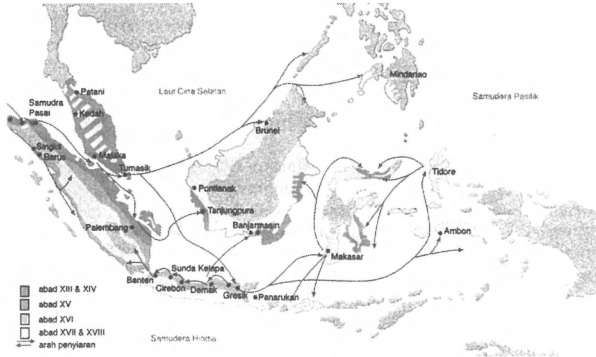


図1-4-7 インドネシアにおけるイスラームの普及経路  
 (Machi Suhadi, Sutarjo Adikusilo, and A. Kardiyat Wiharyanto, *Sejarah SMP 1 untuk Kelas VII*, Jakarta : esis, 2005, p. 66)

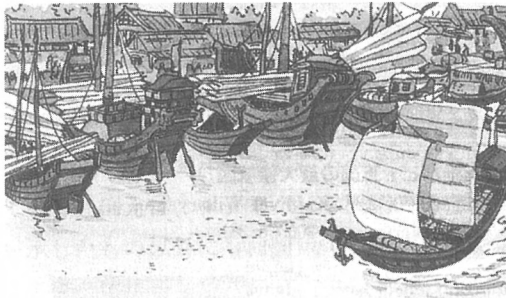


図1-4-8 海上交易で栄えるイスラーム王国の港の風景(その1)  
 (Machi Suhadi, Sutarjo Adikusilo, and A. Kardiyat Wiharyanto, *Sejarah SMP 1 untuk Kelas VII*, Jakarta : esis, 2005, p. 147)

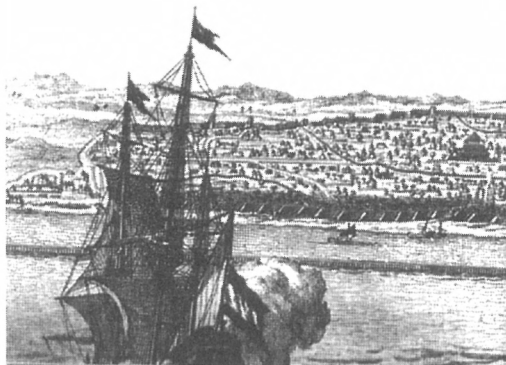


図1-4-9 海上交易で栄えるイスラーム王国の港の風景(その2)  
 (I Wayan Badrika, ed., *Sejarah Nasional Indonesia dan Umum SMA 2 untuk Kelas XI*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 109)

ことをうかがわせるような挿絵も教科書には載せられている(図1-4-8、1-4-9)。

海、あるいは海上交易が主役の時代というのは、ヒンドゥー王国、イスラーム王国の時代である。その典型的な記述は次のような文章に表れている。若干長いが引用しよう。

インドネシアは古くから天然資源の豊富な地域として知られていた。ヒンドゥー・仏教王国の時代から西欧諸民族が来るまで、インドネシア人は各地の交易拠点を通じてその国際貿易に参画していた。インドネシア人は海外の交易拠点でインドネシアの産品を売りさばっていた。また、インドネシアで入手できない産品を買い付けていた。その一方で、海外からは商人がインドネシアの交易拠点に彼らが必要とする産品の買い付けにたくさん来ていた。インドネシア商人が頻繁に訪れた東南アジアの交易拠点は、マラッカ、ジョホール、ケダー、パハン、ペラック、トレンガヌである。一方、海外の商人が買い付けに訪れたインドネシアの交易拠点には、アチェ、バサイ、チレボン、バンジャール、デマック、バンテン、マルク、マカッサルがある。——(中略)——ポルトガル人をはじめとする西欧商人の参画が発展するとともに、東南アジアにおける西欧諸民族の商業活動は活発になっていき、インドネシアにおける商業パターンに変化が起きた。西欧人はその力によって商業を独占という形で支配し始めたのである。その独占体系によって、活発で自由なインドネシア人による商業には制限が加えられた。インドネシア人は特定の民族としか商業に従事することができなかった。その結果、インドネシアの島々は、商業産品を提供するだけの役割を果たすに留まるようになった。こうした状況は20世紀まで続いた<sup>11)</sup>。

この記述を読めば、ヨーロッパ商人の台頭、それに続くヨーロッパ諸国の東南アジア植民地化、特にオランダによるインドネシアの植民地化がインドネシアの海洋王国、そしてインドネシア民族の海洋民族としての発展を妨げたということになる。こうした因果関係の事実はともかく、歴史教科書の上

では、オランダのインドネシア進出後の歴史記述はもっぱらオランダが蘭領東インドの領域（陸域）をどのように経済的に支配していき、さらに原住民を支配していったか、さらに原住民がナショナリズムに目覚めて反植民地運動に立ち上がっていったかという点にしばられている。インドネシアの歴史記述の上で、海は忘れ去られ、陸の開発の歴史、そして人の思想的・行動的営為の歴史が主役となる。ここには1つの盲点がある。植民地以後のインドネシアにおいて、絶対的には海の交易が増えているという事実である。

オランダが蘭領東インドを領有することで、その域内の資源を世界市場に独占的に売りさばくことができるようになり、大いにオランダ本国を潤したことは間違いない。そして、その際にはイスラーム王国が海上交易で隆盛したよりもはるかに質量共に豊富な交易がインドネシアの各港市を拠点に展開していたはずである。しかし、オランダ人によるにせよ、(将来の)インドネシア人によるにせよ、彼らの行動、発言、運動、それらの組織化・制度化を具体的に記すことが可能になると、いくら海上交易の質量が増えようとも記述的にはあまり新しさがないことから、歴史叙述から「海」が遠ざかってしまうのである。「海」における人・物のダイナミズムの時間軸は「陸」における人・物のダイナミズムに比べてはるかに長いがために、陸の歴史を詳細に記すことが可能になればなるほど、短期的なダイナミズムを欠く「海」の歴史はモノトーンに映って記述の対象ではなくなってしまったのである。

では、1945年8月にインドネシアが独立宣言を行って以後の歴史はどのように教科書で書かれているかといえば、国内政治史、国際（政治）関係史が主であり、海に関する記述はほとんどなくなる。国内政治史では、インドネシア共和国が国際的承認を得るまでの過程（1945～49年）、議会制民主主義の時代（1950～59年）、指導される民主主義の時代（1959～65年）、クーデターと共産党解体の時代（1965～67年）、新秩序の時代（1967～98年）、アジア経済危機と「改革」の時代（1998年～現在）という一般的な時代区分に沿った記載が行われている。どの時代の記述をみても、当時の政治経済的状況、政治的に重要な事件の記述が大半を占めており、海上交易、海の役割などは触れられていない。国際（政治）関係史の記述では、インドネシアが提示した「群島国家」論の国際的承認に関しても触れられていない。国際協力に関する項目のところ

で、ASEAN（東南アジア諸国連合）の形成と発展過程が触れられている。グローバルな東西冷戦とアジアにおける熱戦のさなか、ASEANが「東南アジア地域を平和・自由・中立」<sup>12)</sup>にしようと努力していたとある。必ずしも海についての記述ではないが、海を通じてひとくりにし得る東南アジア地域が平和を志向していたことを強調している。

### 3. 中学校、高等学校の国語教科書

エルランガ社、ガラクシー・プспа・メガ社の教科書『インドネシア語・文学』を用いた。エルランガ社の教科書とガラクシー社の教科書の平均ページ数および「海」に関する文章掲載数は、それぞれ平均262ページ・22点、平均138ページ・15点であり、教科書によって「海」の取扱量には違いがあることが分かる。また、「海」に関する文章をテーマ別に分けると次のようになる。

テーマ	エルランガ社	ガラクシー社
島や海岸での生活描写	6	1
自然保護、エコツーリズム	2	0
海に関わる自然破壊・乱獲、それへの概嘆	4	2
(インドネシアの)自然描写・賛美(海を含む)	3	4
自然の脅威(津波を含む)	0	6
水産業	3	0
海岸の観光業	1	0
海洋生物紹介	2	0
釣り	0	1
船	1	0
航海	0	1

表1-4-1 インドネシアの国語教科書にみられる「海」に関する記述(テーマ別)

「海」に関する文章といっても、教科書によって扱うテーマは大きく異なっている。ガラクシー社においては圧倒的にスマトラ沖地震に伴う津波に関する文章が多い。共通点としては、とりわけ海を含む自然への賛美などの文章の場合、詩の形式を取っているものが多い。島や海岸での生活描写としては、同世代の子供が自分の島を誇らしげに紹介するといったもの<sup>13)</sup>や、ある島の客観的なデータを提示してその島の魅力を伝えるもの<sup>14)</sup>がある。自然保護に関わるものとしては、マングローブ植林の必要性を訴えるもの<sup>15)</sup>や、観光開

発の方法としてエコツーリズムの手法を紹介するもの<sup>16)</sup>がある。一方、自然破壊・乱獲に関わるものとしては、ある有名な歌手の歌詞を引用して自然破壊を慨嘆したもの<sup>17)</sup>、ロブスターの激減について客観的に伝えるもの<sup>18)</sup>などがある。自然を賛美するものは、海の豊かさを賛美するもの、とりわけインドネシアの豊かさを海も含めて賛美するもの<sup>19)</sup>などがあり、詩の形式を取るものが多い。自然の脅威については、津波に関するものが多い<sup>20)</sup>。水産業については、ある人物が水産業で成功する伝記などが取り上げられている<sup>21)</sup>。海岸の観光業については、ウインド・サーフィンで有名になった海岸地区のことが触れられている<sup>22)</sup>。釣りというテーマでは、海における釣りの魅力を丁寧に紹介した文章がある<sup>23)</sup>。船については新型船舶の仕様を客観的に描いたものがある<sup>24)</sup>。航海については、マラッカ海峡からジャワ海を航海したときの眺めを描いている<sup>25)</sup>。

「海」に関する記事には海岸の風景写真などが挿絵として取り入れられていることが多い(図1-4-10)。また、砂浜とヨットといった写真(図1-4-11)を生徒が見て、その美しさを文章化するように求める課題もある。

全体的な印象としては、海を賛美したり、インドネシアの自然を賛美したりしたものは詩の形式を取ることが多く、一方、自然の脅威、自然破壊を記したものは客観的な記述が多い。いずれにしても、インドネシアには豊かな海があるということは大前提としており、インドネシアは海と共にあることが読み取れる。しかし、そこでいう「海」は必ずしも東アジアをはじめとした開かれた海ではなく、インドネシアの「海」という感が強い。

参考までに、祖国インドネシアを誇るときの典型的な詩を以下に載せる。ここには海と結びついた祖国インドネシアの風景が見事に現れている。

インドネシア・我が祖国(作詞：モハマド・ヤミン)<sup>26)</sup>

うるわしき浜辺に腰を下ろす  
浜辺には海から波が押し寄せては散っていく  
浜辺には白い波の泡がはじけて散っていく  
青き海には島が映え

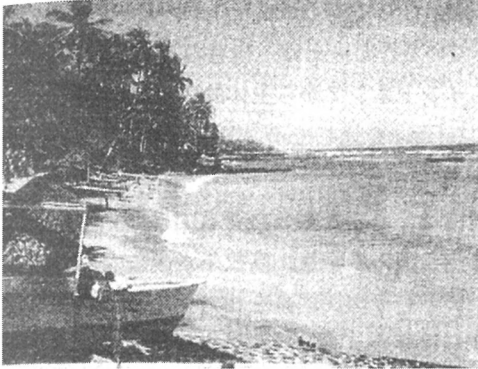


図1-4-10 海岸の風景写真(その1)  
(Nurhadi, Dawud, and Yuni Pratiwi, *Bahasa dan Sastra Indonesia 1 untuk SMP Kelas VII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 108)



図1-4-11 海岸の風景写真(その2)  
(Dawud, et al., *Bahasa dan Sastra Indonesia 1 untuk SMA Kelas X*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 120)

山々は見事な姿を見せ  
その周りには清き水がうるおう  
我が祖国の名をインドネシアという  
・・・

### 3 おわりに

これまでの分析からインドネシアの教科書における「海」の記述について、いくつかのポイントを提示したい。まず、どの教科書を読んでも、インドネシアにとって「海」がさまざまな意味で重要であることを十分にうかがわせるものとなっている。次に、その「海」の描き方であるが、インドネシアと東

アジアを含め他の世界とをつなぐ媒体として描くか、インドネシアの「海」として描くか、どちらに重点を置いているかといえ、後者の方である。また、つなぐ「海」として描く場合にも、インドネシアから主体的に「海」を通じてつながるといふ記述は乏しく、むしろ「海」を通じてインドネシアにさまざまな物が流入してきたという記述が多い。

教科書がこうした傾向にある理由はそれほど難しいことではない。今回取り上げた教科書は、インドネシア共和国の中学生・高校生が読むための教科書であり、その関心はインドネシアという国民国家を相対化することであるよりも絶対化することにある。最も重要なメッセージの1つは、インドネシアがどのような経過を経て今に至っているのか、そしてどのような国民国家なのかということである。従って、「海」を描くに当たっては、海がインドネシアを作り上げるに当たり何をもたらしたのか、さらに海がどのようにインドネシア化していったのかを記述することが重要になるのである。

このように「海のインドネシア化」に主眼があると、海はインドネシアと東アジア、もっと広く世界とをつなぐという理解を醸成することは難しい。現在の教科書のままでは、「海のインドネシア化」を相対化しうる視点は乏しく、津波被害、海洋資源の急減、跋扈する海賊はインドネシアの海の問題として扱われがちなのである<sup>27)</sup>。インドネシア共和国の教科書である以上、「インドネシア化された海」という視点を消し去ることはできないにしても、何らかの形で相対化、脱構築する視点も教科書に取り入れるべきであろう。そのひとつの方法は、「インドネシア化された(はずの)海」の諸問題(津波、海洋資源希少化、珊瑚礁保全、海賊など)が実はグローバルな諸問題であり、インドネシアの海の諸問題はインドネシアだけでなく世界的に取り組むべき諸問題であり、また、インドネシアの海の諸問題は他国の海でも起きている諸問題であるという当たり前の事実を教科書に盛り込むことである。さらに、そうした諸問題はASEAN共通の課題、さらには東アジア諸国共通の課題として具体的取り組みが始まっていることも盛り込むべきであろう。新聞を読み、テレビを見れば、こうした事実を知ることができるが、海の脱インドネシア化を行い、「つなぐ海」という理解を積極的にインドネシアでも作り出すためには、教科書においても海の諸問題のグローバル性を強調



していく必要があるであろう。

## 注

- 1) 「ワワサン・ヌサンタラ (Wawasan Nusantara)」というのは、インドネシア国民が持つべき公的な国家観でもある。その定義は次のようなものである。「インドネシア国民自身、そしてインドネシア国民を取り囲む環境は多様にして戦略的価値を持っている。従って、インドネシア国民が自民族、その環境をとらえ、何らかの対応を取るに当たっては、国家的目標達成のために、領域の統一性を最重視しつつ、あらゆる国民生活における多様性を尊重する必要がある」(Drs. S. Sumarsono, MBA dll, Pendidikan Kewarganegaraan, Jakarta : PT Gramedia Pustaka Utama, 2005, p. 83)。群島水域の国際的承認はその国家観を裏打ちするものとして位置づけられている。ワワサン・ヌサンタラについては中島健太氏(名古屋大学大学院生)の知見によるところが大きい。記して感謝する。
- 2) Suwarno Adiwijoyo, *Konsolidasi Wawasan Maritim Inonesia*, Jakarta : Pakar, 2005, pp. 44-45.
- 3) コンパス紙 (Kompas)、2004年2月18日。
- 4) 雑誌『ガトラ (Gatra)』2006年1月特集号のテーマは、「海における我々の栄華(はまだ来ず)」というものであり、ポスト・スハルト体制後のインドネシアが海洋開発に力点を置きつつも、具体的政策が欠けている点を批判している。Gatra, No. 08, Tahun XII, Januari 2006.
- 5) Tim Abdi Guru, *Geografi untuk SMP 1 Kelas VII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 91.
- 6) 前掲5) p. 94.
- 7) 前掲5) p. 245.
- 8) K. Wardiyatmoko, *Geografi SMA 1 untuk Kelas X*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 200-2.ただし、中学校1年生用の地理教科書にも国境確定の歴史は触れられている(前掲5) pp. 169-70)。
- 9) K. Wardiyatmoko, *Geografi SMA 2 untuk Kelas XI*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 99-101.
- 10) 前掲9) pp. 207-8.
- 11) Machi Suhadi, Sutarjo Adisusilo, and A. Kardiyat Wiharyanto, *Sejarah SMP 1 untuk Kelas VII*, Jakarta : esis, 2005, pp. 121-22.
- 12) I Wayan Badrika, ed., *Sejarah Nasional Indonesia dan Umum SMA 3 untuk Kelas XII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 292.
- 13) Nurhadi, Dawud, and Yuni Pratiwi, *Bahasa dan Sastra Indonesia 1 untuk SMP Kelas VII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 181.
- 14) Dawud, et al., *Bahasa dan Sastra Indonesia 1 untuk SMA Kelas X*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 22-23.

- 15) Tim Bahasa dan Sastra Indonesia SMA, *Bahasa dan Sastra Indonesia 3 untuk Kelas XII SMA Ilmu Alam dan Ilmu Sosial*, Jakarta : PT Galaxy Puspa Mega, 2005, p. 42.
- 16) Nurhadi, Dawud, and Yuni Pratiwi, *Bahasa dan Sastra Indonesia 3 untuk SMP Kelas IX*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 66-67.
- 17) Dawud, et al., *Bahasa dan Sastra Indonesia 1 untuk SMA Kelas X*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 20-21.
- 18) 前掲12) p. 25.
- 19) Nurhadi, Dawud, and Yuni Pratiwi, *Bahasa dan Sastra Indonesia 2 untuk SMP Kelas VIII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, p. 21.
- 20) Tim Bahasa dan Sastra Indonesia SMP, *Bahasa dan Sastra Indonesia 2 untuk Kelas VIII SMP*, Jakarta : PT Galaxy Puspa Mega, 2005, pp. 71-75, 105-7.
- 21) Nurhadi, Dawud, and Yuni Pratiwi, *Bahasa dan Sastra Indonesia 2 untuk SMP Kelas VIII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 202-3.
- 22) 前掲20) pp. 28-29.
- 23) Tim Bahasa dan Sastra Indonesia SMP, *Bahasa dan Sastra Indonesia 3 untuk Kelas IX SMP*, Jakarta : PT Galaxy Puspa Mega, 2005, pp. 67-69.
- 24) Dawud, et al., *Bahasa dan Sastra Indonesia 3 untuk SMA Kelas XII*, Jakarta : Penerbit Erlangga, 2005, pp. 13-14.
- 25) Tim Bahasa dan Sastra Indonesia SMA, *Bahasa dan Sastra Indonesia 1 untuk Kelas X SMA Ilmu Alam dan Ilmu Sosial*, Jakarta : PT Galaxy Puspa Mega, 2005, pp. 60-61.
- 26) 前掲20) p. 211.
- 27) 例外としては、中学校1年生の教科書に掲載された海面上昇の問題をグローバルな問題として取り上げたエルランガ社の国語教科書がある。